

氏 名：塩 澤 己寿枝

学位の種類：博士（看護学）

報告番号：甲第100号

学位記番号：博第98号

学位授与年月日：令和3年9月21日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論文題目：茶話会グループの実践を通しての入院患者のリカバリーと看護師のエンパワメント：  
精神科病棟におけるアクションリサーチ

Recovery of Patients and Empowerment for Nurses through Practice of  
Tea-party-style Groupwork: Action Research in Psychiatric Ward

論文審査員：主査 守 田 美奈子

副査 小 宮 敬 子（正研究指導教員）

副査 本 庄 恵 子（副研究指導教員）

副査 松 本 佳 子

副査 武 井 麻 子

## 論文審査の結果の要旨

日本における精神科入院患者数は先進国の中で最も多く、平均在院日数も飛びぬけて多い現状にある。入院1年以上の長期入院患者数が全体の2/3を占め、再入院率も年々増加傾向にある中で、入院患者の回復に向けたケアのあり方は長年の課題となっている。

本研究は、総合病院の精神科病棟で患者へのかかわりに困難を覚えていた病棟看護師とともに、茶話会形式のグループ(以下、グループ)を立ち上げ、1年間にわたり週1回、計50回実施して、患者のリカバリーと看護師のエンパワメントのプロセスを明らかにしようとしたアクションリサーチである。

グループでは病棟の都合もあり、当初予定していた長期入院の招待患者だけでなく、急性期の患者や再入院の患者も参加するようになるなど、想定外の事態が生じたが、その都度、研究参加者である看護師との話し合いを繰り返し、この病棟の実情に添って柔軟に対応していった。

その結果、患者たちは、主役となる語り手を交代しながら、グループの中で病いの体験はもちろん、これまでの人生におけるさまざまな喪失体験や傷つき体験と、それにまつわる悲しみや怒り、不安、寂しさ、空虚感といった感情を豊かに、また率直に語り合うようになり、そのなかで共感や反発の入り混じる、独特な支え合いの空間が醸成されていった。また、グループのコ・コンダクター役の看護師も、当初は5人の固定メンバーであったが、病棟の状況から結果的に計14人の看護師が参加することになり、多くの看護師がグループを経験することで、ふだんの関わりでは触れることがなかった患者の新たな一面を知り、患者への信頼感を培うことになった。また、自由に率直に語り合う患者の姿に触発され、看護師自身のこれまでの不自由に気づくことができ、看護師の役割意識という鎧を解くことができて行った。

考察では、このグループが、日ごろ孤立しがちな患者たちにとって他者とのつながりを感じられる居場所を提供することになったこと、その中で患者たちが自身の感情に気づき、リフレクションを深めていく中で、仲間と苦しみを分かち合い、「自らの声を取り戻す」体験をし、それが患者のリカバリーに大きく寄与していたこと、同時に看護師にとってもエンパワメントとなっていたことが、リカバリーの概念とともに考察された。とくに病期や病態の異なる多様な患者が自由に参加できるグループとなったことで、患者自身が主体的に選んで参加することが可能になり、それが患者のリカバリーにつながったこと、ともすれば崩壊の可能性すらあった不安定なグループをつなぎ止めたのは、毎回のグループの前後に行われたレビューやプレミーティングであったことなどが検討された。

以上のような点から、こうした現場のスタッフを巻き込んでの実践的研究は時宜を得たものであり、その意義は大きいと評価された。また、変化の激しい急性期精神科病棟での実践研究としてのオリジナリティも認められ、精神看護のみならず、あらゆる領域の看護にとって重要な知見であると評価された。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。